

ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』 における優美について¹

北 夏 子

序

「優美」「優雅」と訳されるフランス語の *grâce* が、大文字で用いられることが多い「恩寵」を意味する *Grâce* に連続的であるとする、アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) における *grâce* についての研究が既に私たちの前に示されていることは今更触れるまでもないことであると思われる²。本研究が扱うベルクソン自身もまたラヴェッソン (Jean Gaspard Félix Ravaisson-Mollien, 1813-1900)³ を扱う際にこの手法を用いてい

¹ 本稿は、筆者が2015年度に筑波大学に提出した博士論文、タイトル「ベルクソン哲学に対する H. スベンサーの影響の研究」を基にしており、博士論文で使用した言葉遣いを一部含む。ベルクソンは既存の研究で明らかにされてきた以上にスベンサーに影響を受けていると結論づけたこの博士論文に対して、本稿は、主題を優美論に絞り、『意識に直接与えられたものについての試論』におけるベルクソンの優美論の独自性を明らかにする目的を持つ点において、また、ラヴェッソンの優美論と関係づける点において、オリジナリティを持つ。また、博士論文の一部を基にして、2016年10月15日に筑波大学で行なわれた筑波大学哲学・思想学会で「ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』における「優美」をめぐって」というタイトルで発表した原稿、および、2017年3月19日に京都大学で行なわれたベルクソン哲学研究会で、「ベルクソン哲学における *grâce*——ラヴェッソン、スベンサー、ベルクソン——」のタイトルで発表した原稿を、いただいたご質問やご指摘の一部に答えるかたちで改稿したものである。

² 現代日本における代表的ベルクソン研究者である杉山直樹氏は次のように述べる。「ベルクソンはそれを「一種の交感」「身体的共感」と呼んでいるが、これはより上位の優美、「精神的共感」、ひいては「おのれを与え (*se donner*) 」んとする動き、自己贈与、すなわちいわゆる恩寵 (*grâce*) の観念をひそかに予示しつつ、そのことによってある種の魅惑をすでに私たちに与えてくるものだ。優美の「抗い難い魅力」はそこに生じるのだとベルクソンは述べている。これはかのラヴェッソンの優美論の一つの応用であり、ベルクソンもまた「優美」と「恩寵」(*grâce*) の連続性を述べているわけだ。ラヴェッソンは、神の本質を惜しみなき自己贈与 (*se donner*) としての愛に見出し、その感性的な現れを「優美」としたのだが、この発想はひそかにベルクソンの思考を導くものであることだろう」杉山直樹、『ベルクソン——聴診する経験論』、東京：創文社、2006年、265～266頁。本稿は、杉山氏の研究に心からの敬意を表しつつ、優美論については、氏とは別の考えを提示しようと試みるものである。

³ ラヴェッソンとは以下のような人物である。「ラヴェッソンは1837年に出版された『アリストテレスの形而上学試論』、1838年の学位論文『習慣論』、1867年の『十九世紀フランス哲学についての報告』などで知られる。名門貴族の出の彼は教職にたずさわることを選ばなかった。行政で要職を歴任した。図書館総監督官、ルーヴル美術館の古代美術担当学芸員、哲学の教授資格試験の審査員長といったものだ。」ジャン・ルフラン『十九世紀フランス哲学』川口茂雄他訳、東京：白水社、2014年、94頁。ラヴェッソンとベルクソンの関係は次のような関係である。「1900年に死去する前の1881年に、ラヴェッソンは精神科学・政治科学アカデミーの会員に選出された。1900年に死去した際に、同アカデミーではベルクソンが「フェリックス・ラヴェッソン氏の生涯と業績」を読み上げた。ラヴェッソンの席を継いだのがベルクソンだったのである」、『十九世紀フランス哲学』杉山直樹他訳、東京：知泉書館、2017年、349頁。ラヴェッソンの『十九世紀フランス哲学』とは次のような書物である。この本の「成立の直接のきっかけに関しては簡単に述べることができる。1867年開催のバリ万国博覧会に際して、公教育省はフランスにおける諸学問の現状報告の作成を求めた。『フランスにおける文芸と科学の進歩についての報告集 (Recueil de rapports sur les progrès des lettres et des sciences en France)』がそれであり、「哲学」の報告書作成は、ラヴェッソンに任せられた。かくして1868年に刊行されたのが本書だ、というわけである」同書、347頁。

る⁴ことを考えると、この手法は古典的な手法であるといえるのかもしれない。ベルクソン自身の言葉をベルクソンの哲学に当てはめて、ベルクソン哲学における *grâce* も *Grâce* に直結すると示す⁵ 以外に、この概念について、何か言えることはあるのか。

本稿は、これまでになされてきたベルクソンの *grâce* に注目する諸研究の成果の恩恵に与りつつ、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) による *gracefulness* についての考察に対する分析を挿入することによって、ラヴェッソンの影響もあると思われるベルクソンの *grâce* についての考察をより限定した仕方で示そうとするものである。「優美」をすぐさま「恩寵」と結びつけるのではない仕方で、ベルクソンの思想の独自性をより明確に示すことを目的とする。本稿は、次のような手順で進めることにする。まず、本研究も既存の研究と同様にベルクソンはラヴェッソンの影響下にあったと見做し、ラヴェッソンの *grâce* の特徴について確認する⁶。次に、ベルクソンがそれを弾みにして自身の思索を展開することになったスペンサーの哲学における *gracefulness* について考察する。ラヴェッソンからベルクソンへの影響とスペンサーからのベルクソンへの影響を明らかにするという準備作業を経た後で、クレルモン＝フェランでの美学講義の内容を確認しつつ、ベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』(*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889., 以下、『直接与件』と略記)における *grâce* について考察する。本稿では、「美」との関係を意識して、*grâce* には日本語の「優美」をあてることにする。

1 ラヴェッソンの哲学と優美 ——魔法——

ラヴェッソンによる『十九世紀フランス哲学』(*La philosophie en France au XIX^e siècle*,

⁴ ベルクソン自身が彼の「ラヴェッソンの生涯と業績」の中で、*grâce* の語の特徴を意識して次のように述べているのは良く知られているであろう。諸々の研究でも触れられて来た箇所ではあるが、本稿でも当該箇所を引用することにする。「美は形に属しているが、すべての形はそれを描く運動に起源をもち、形は記載された運動にすぎない。ところでわたしたちが美しい形を描く運動が何であるかと考えれば、わたしたちはそれが優美な運動だということを知る。美は固定させられた優美であるとレオナルド・ダ・ヴィンチは言った。そこで問題は、優美とは何であるかを知ることである。しかしこの問題の方が解決しやすい。というのは、すべて優美なものの中にわたしたちがいれば気まかせと思いやりのようなものを見たり感じたり推測したりするからである。そこで宇宙を芸術家の眼で静観する人には、美をとおして優美さが読みとられ、優美の下から善意が透いて見える。すべてのものはその形が示す運動のなかに、自分を投げ出す原理の無限な寛容を示している。そこで人が運動に見る愛らしさと、神の善意の特徴になっている寛大さ〔恩寵〕とを、同じ名で呼ぶのは間違っていない。*grâce* という言葉の二つの意味はラヴェッソン氏からみると一つにしかならなかった」(PM, 280、河野訳 382～383頁)。

⁵ 『意識に直接与えられたものについての試論』「第一章」における「優美」を巡るベルクソンの考察は、第一章の「質」と「量」とを峻別するベルクソンの目的に照らし合わせると、特異な考察になっている。この「優美」を巡る議論においてベルクソンが「質」と「量」との一体化について述べているののだとすれば、ベルクソンの『直接与件』の第一章の目的は達せられないことになる。というのも、「優美」が「質」と「量」とを峻別できない例になってしまうからである。ベルクソンの優美論をラヴェッソンの恩寵論であると見做すことは、ラヴェッソンの優美論があらゆる関係の調和を述べる議論であるため、ベルクソンの議論がうまくいっていないことを示唆してしまうことになる。この点については、2017年9月2日に明治大学で行なわれた日仏哲学会で「「優美」を巡る思索の限界とその意味——ベルクソンの「優美」を中心に——」のタイトルで口頭発表を行なった際に部分的に明らかにした。

⁶ 本稿でラヴェッソンの優美論について論じることから始めるのは、ベルクソンの優美論についての既存の研究を意識してのことでもある。

1868.)は、対立する思想や思索、概念と方法それぞれが、「優美」「調和」へと向かうその仕方を私たちに示すものである。魂の底といった言葉を用いながら、検討された思想や思索の「調和」について明らかにしていくその思索において「優美」はどのような役割を担っているか。

『十九世紀フランス哲学』は「哲学とは何か」という問いに答えようとする思索の跡であり、当時、哲学とは何であると考えられていたかを明らかにしている。この著作では、哲学が関係の学であると考えられている。もちろん、スペンサー等を引いて、相対性に落とし込んでしまうような哲学的思索を思索の本質とは見做せないという態度がとられている。しかし、哲学を関係の学であるという考えを引き受けた上で、関係の関係自体を一気に捉えるそのこと自体が求められているように見える。諸々の関係の在り方が素描され、関係として規定できないように思われる本能さえも思惟であるとされ、夢や狂気の分析へ展開し、私たちの魂や存在、そして生の基底を形づくるものへと考察は及ぶ。その基底に「意志」といった積極的働きを見だし、「自由」や、「愛」を関連づけていく仕方で「優美」や「恩寵」そして「調和」といった概念で私たちの「魂の底」が性格付けられる。哲学的営みは私たちに直接与えられている存在の根底を明らかにするものであると考えられている。

「優美」については次のように述べられている。

美 (beauté) というものを単に物質的で感性的な心地よさ (agrément) におとしめてしまうことを怖れて、心地よさという観念を完全に美から遠ざけてしまう理論もあるわけだが、実際には、そうした理論の言うところに反して、一切の美しいものが持つ明白な特徴とは我々を喜ばせる (plaire) こと、しかもある秘密の魔法 (magie) によるかのごとく、すなわち言い古されてはいても実にもっともな言い方では、我々を「幻惑」し「魅了」する魔法によるかのように我々を喜ばせることではないか。この魅力 (charme) は、とりわけ「優美」(grâce) と呼ばれるもののうちに見いだされる。そして知性のいまだ外的な領域を超えた言わばその向こう側で、魂そのものにまで到達し、心情 (cœur) を揺り動かすこの優美、その由来とは、感覚を持たない物質や、大きさや、大きさを秩序づける形相などではなく、心情そのもの、言うなら魂の根底であると思われまいだろうか。⁷

「美」の明白な特徴は、私たちを「喜ばせる」というものである。それは一種の「魔法」であるのではないかと考えてしまうほど、私たちが否応無く捉えられてしまうそういった特徴である。こういった魅力が特に見いだされるのは、「優美」と呼ばれるものうちである。更には、この「優美」は、物質でもなく形相でもなく、「心情そのもの」とでも言えるような「魂の根底」に由来する。ラヴェッソンの叙述の仕方に従えば、心情は、心情そのものである魂の根底に由来する「優美」によって揺り動かされる。また、同じく「優美」に関して、「結論」の最終段落でラヴェッソンは次のように述べている。

八〇

⁷ Félix Ravaisson-Mollien, *De l'habitude. La philosophie en France au XIX^e siècle.*, Paris: Fayard, 1984, p. 285, 杉山・村松訳 306～307頁。また、307頁の注5)も参照。

フランスの精神がその後変化しなかったとすれば、万物を物質的要素と盲目的機械論に還元する哲学体系を、別の学説がやすやすと打ち破っていくのがこのフランスで目にされるのも、極めて当然のことである。その高き学説はこう教えている。物質とは存在の最後の段階、影のごときのものである。真の存在、それ以外の存在は不完全な下絵でしかないような真の存在とは、魂のそれである。実のところ、存在するとは生きていることであり、生きるとは思惟し意志することである。一切は結局、説得によってのみ生じる。善と美はそれだけで宇宙と宇宙の作者自身とを説明する。自然はその限定された姿しか我々に示さないが、無限と絶対は、精神の自由のことである。かくして自由こそ、諸事物の帰する究極なのだ。現象が生じている表層をかき乱すさまざまな無秩序や対立のその下、根底において、本質的で永遠的な真理として、すべては恩寵 (grâce) であり、愛であり、調和なのである。⁸

「恩寵」とされた grâce は、愛、調和と言い換え可能なものであると考えられているように思われる。「魂の根底」と「優美」とが関連づけられていたことは先に見たが、ここでも「根底において」、「すべては」と言われていることから考えて、「優美」と「恩寵」とは、質による質へのはたらきであり、積極性をもつ点において、同一である。「優美」についての考察から理解されるのは、私たちの存在そのものの基盤において能動的働きがあると考えられているということである。

*

「優美」が「愛」と「調和」に、その積極性と対立を越える性格によって言い換え可能とされているとしたら、しかもその起源を問うことなくすぐさま「神的な」と形容されるとしたら⁹、絶対的付与的性格が認められていると考えるのが妥当だと思われる。この絶対的な付与的性格が、「魔法」という言葉にとどめてよいと判断されているのではないか。すなわち、ここではその与えられ方が問題にされている、と言える。「優美」へと集約していく『十九世紀フランス哲学』は、私たちがどういった現象に優美を感じるかという論点ではなく、「優美」の由来を問うことによって構成されているという特徴を持つ。「優美」の由来を問うと、由来を問うことができないことが示唆され、その絶対的な付与的性格が認められる。バルクソンの言う通り、ラヴェッソンにとって「優美」と「恩寵」は同じ意味をもつ。能動的根底は絶対的受動的根底でもある。存在の根底における主客同一と言えるような事態を、「優美」へと集約するラヴェッソンの議論は示唆する。

七九

2 スペンサーの「優美」(gracefulness)¹⁰

——力の節約——

由来を問うて絶対性を探究する仕方をとらず、私たちが優美さを感じるその現象を分析する仕方では優美を論じるのがスペンサーである。スペンサーは次のように述べている。

⁸ *Ibid.*, p. 320、同書 345～346 頁。

⁹ 「「愛」に対応するのは、本来超自然的な上位の崇高、最も卓越し真に神的な美をなす崇高、つまり優美と柔和さの崇高である」、*Ibid.*, p. 286、同書 309 頁。

確証的なさまざまな事実を思い浮かべてみた後で、私は間もなく次のように結論した、優美というのは、運動に適用されると、力の節約とともに生じる運動について言われるし、動物の諸形態に適用されると、この節約をする能力のある形態について言われる。優美が、姿勢に適用されると、この節約が維持され得る姿勢について言われる。また、優美は、無生物に適用されると、展示品のよう、これらの姿勢と形態にある程度類比したものについて言われる。この一般化は、全ての真理とっては言い

¹⁰ 本節で扱う主題は執筆者が提出した博士論文でも扱った主題である。博士論文中の誤訳については修正し、読解部分も必要に応じて加筆・訂正した。資料的価値を高めるために、注に原文を載せることにした。

¹¹ Herbert Spencer, *Essays: Scientific, Political, & Speculative.*, vol.II, *The Works of Herbert Spencer*, vol.XIV, Osnabrück: Otto Zeller, 1966, pp. 381-382. スペンサーの著作からの引用については北が訳した。以下原文の引用にあたってはOと略して引用元を示すことにする。“After calling to mind sundry confirmatory facts, I presently concluded that grace, as applied to motion, describes motion that is effected with economy of force, grace, as applied to animal forms, describes forms capable of this economy; grace, as applied to postures, describes postures which may be maintained with this economy; and grace, as applied to inanimate objects, describes such as exhibit certain analogies to these attitudes and forms.

That this generalization, if not the whole truth, contains at least a large part of it, will, I think, become obvious, on considering how habitually we couple the words *easy* and *graceful*; and still more, on calling to mind some of the facts on which this association is based”, (O). この文章を含む Gracefulness. についての考察は、1852年の12月25日に *The Leader* に掲載されたものである、とある。

版によって異なる表現が見られるため、当該箇所別の版からの引用文も記すことにする。

“And remembering sundry confirmatory facts, I presently came to the general conclusion, that, given a certain change of attitude to be gone through — a certain action to be achieved, then it is most gracefully achieved when achieved with the least expenditure of force. In other words, grace, as applied to motion, describes motion that is effected with an economy of muscular power; grace, as applied to animal forms, describes forms capable of this economy; grace, as applied to postures, describes postures that may be maintained with this economy; and grace, as applied to inanimate objects, describes such as exhibit certain analogies to these attitudes and forms.

That this generalization, if not the whole truth, contains at least a large part of it, will, I think, become obvious, on considering how habitually we couple the words *easy* and *graceful*; and still more, on calling to mind some of the facts on which this association is based”, *Essays: moral, Political and Aesthetic.*, New York: D. Appleton and Company, 1874, pp. 312-313. (以下Aと略)

当該箇所は後にベルクソンによって考察されることになる箇所でもある。ベルクソンが『直接与件』で引用するフランス語版も載せることにする。ベルクソンが『直接与件』に記した頁数は283頁である。下記の頁にある内容を指示していると思われるため、ベルクソンが参照したのは別の版であるか、ベルクソンが引用頁数を誤って記入したかのどちらかであると思われる。

“Il me revint à l’esprit divers faits qui confirmaient mon idée, et j’arrivai alors à conclure, d’une façon générale, qu’étant donné un certain changement d’attitude à réaliser, une action à accomplir, l’action a d’autant plus de grâce qu’elle s’exécute avec une moindre dépense de force. En d’autres termes la grâce, du moins la grâce dans le mouvement, c’est un mouvement exécuté de façon à ménager la puissance des muscles; la grâce, dans les formes vivantes, c’est une forme propre à réaliser cette économie; la grâce, dans les postures, c’est une posture qu’on peut garder en ménageant cette puissance; et la grâce, dans les objets inanimés, c’est tout objet de nature à rappeler par analogie ces attitudes et formes.

Cette idée d’ensemble, si elle n’est pas la vérité tout entière, en enferme au moins une bonne partie: on s’en apercevra, je crois, si l’on considère l’habitude que nous avons de joindre ces deux mots: *aisé, gracieux*; et plus encore, si l’on se rappelle quelques-uns des faits sur lesquels est fondée cette habitude”, Herbert Spencer, *Essais de morale, de science et d’esthétique. Essais sur le progrès.*, trad. M. A. Burdeau, Paris: Librairie Germer Baillièrre et C^{ie}, 1877, p. 284. (以下Lと略)

過ぎだが、少なくともその大部分を含むということは、思うに、どのように私たちが容易さ (*easy*) と優美 (*graceful*) という言葉を習慣的に結びつけるかについて考えると、そして更に、精神にこの連想が基づいている諸事実の幾つかを思い起こすと、明らかになるだろう。¹¹

「優美」はなによりも「力の節約」であり、この「節約」がそれぞれの仕方で「形態」「姿勢」「無生物」に表わされると言われる。「優美」と「容易さ」は、習慣的に連想によって関係づけられる。両概念の関係を示すことで「優美」が説明される。「容易さ」を感じさせる運動とは、力が節約されている運動である。続いて、「優美」と「力の節約」の関係が論じられる。

優美と力の節約のつながりは、スケートをする人々によって最もはっきり認められるだろう。彼らは、すべての初期の試みや、特にフィギアスケートをするときの最初のおどおどした試みは、ぎこちないのと同様疲れさせるものであることを思い出すだろう。また、技術の獲得は、容易さの獲得でもあることを思い出すだろう。必要な自信を持つこと、そして習得された、両足のしかるべき制御、それらの胴体のねじりと両腕のねじりは、かつてはバランスを維持するために使われ、不要だと分かる。身体はコントロールすることなくそれに与えられた衝動に付き従う。両腕は思うままに揺れる。また、何らかのエポリューション（回転）をする優美なやり方は、最小限の努力を消費するやり方であることがはっきりと感じられる。観客はその同じ事実を、彼らがそれを探すならば、見落とすことはほぼあり得ない（括弧内補足引用者）。¹²

¹² “This connexion between gracefulness and economy of force, will be most clearly recognized by those who skate. They will remember that all early attempts, and especially the first timid experiments in figure-skating, are alike awkward and fatiguing; and that the acquirement of skill is also the acquirement of ease. The requisite confidence, and a due command of the feet having been obtained, those twistings of the trunk and gyrations of the arms, previously used to maintain the balance, are found needless. The body is allowed to follow without control the impulse given to it; the arms to swing where they will; and it is clearly felt that the graceful way of performing any evolution is the way that costs least effort. Spectators can scarcely fail to see the same fact, if they look for it”, (O, 384).

“This connection between gracefulness and economy of force, will be most vividly recognized by those who skate. They will remember that all early attempts, and especially the first timid experiments in figure skating, are alike awkward and fatiguing; and that the acquirement of skill is also the acquirement of ease. The requisite confidence, and a due command of the feet having been obtained, those twistings of the trunk and gyrations of the arms previously used to maintain the balance, are found needless; the body is allowed to follow without control the impulse given to it; the arms to swing where they will; and it is clearly felt that the graceful way of performing any evolution is the way that costs least effort. Spectators can scarcely fail to see the same fact, if they look for it”, (A, 315-316).

“Cette liaison entre la grâce et l'économie de la force sera saisie très-vivement par les patineurs. Ils se rappelleront que les premiers essais, et surtout les premières et timides tentatives pour faire des figures en patinant, sont à la fois gauches et pénibles; et qu' en cela acquérir de l'adresse, c'est aussi acquérir de l'aisance. Une fois qu'on a pris sur soi d'avoir la confiance nécessaire, et qu'on sait mener ses pieds, ces contorsions du tronc et ces évolutions des bras, dont on se servait d'abord pour garder l'aplomb, on les trouve inutiles; on laisse le corps suivre sans contrainte l'impulsion qu'il a reçue; les bras flotter à leur guise; et on sent bien que le moyen d'exécuter un mouvement en y mettant de la grâce, c'est le moyen qui coûte le moindre effort. Les spectateurs ne manqueront guère de remarquer le même fait, s'ils y regardent”, (L, 287-288).

スペンサーは私たちが「優美」について考えるための手だてとして「スケート」をする人々を対象として用いている。「力の節約」が実現された運動は「技術の獲得」によってもたらされる。「努力を最も少なく費やす」、「最小の努力しか要しない」ということが、「力を節約する」ということに言い換えられている。「力」(force)を「外に」(ex)最も出さずに「形を仕上げる」(perform)ことが、「優美だ」というわけである。「形」を「観る」観客にも、いわば「最小限の省エネ」によってその「形」が実現されていることが分かる、つまり「優美」が分かる、という構造になっている。議論は、「優美」と、運動における容易さ、つまり「力の節約」の、習慣によって形成された関係が齎す効果へと移行する。この効果とは次のようなものである。

スケートへの言及が示唆していることは、優美な運動は、曲線運動として定義されるかもしれないということだ。確かに、直線の運動及びジグザグ運動はその概念から除外されている。ぎこちない運動が含む急な中断はその反対のものである。優美の主な特徴は連続性、滑らかさである。しかしながら、次のことが発見される。これが同一の真理の単なる別の側面であり、すなわち、曲線運動は経済的な・節約する運動であることが理解されるだろう。¹³

「力の節約」を実現している「優美」な運動は、「曲線」を描く運動として認識される。「曲線運動」は、「連続性」と「滑らかさ」をもつだろう。「曲線運動」は「力の節約」が実現されている運動であるとともに、「連続性」と「滑らかさ」をもつ運動である、と整理されていく。「優美」－「容易さ」－「力の節約」－「曲線運動」－「連続性」「滑らかさ」と関係づけられるが、「曲線運動」と「力の節約」の関係は、「曲線運動」が「連続性」「滑らかさ」をもつのが自明だとされる関係とは、別の観点によって結びつけられている。前者の関係の構築は習慣により、後者は習慣によらない。少なくともスペンサーはここで習慣の話をしな。習慣に支えられ、「曲線運動」は「経済的な・節約する運動」であると

¹³ “The reference to skating suggests that graceful motion might be defined as motion in curved lines. Certainly, straight and zig-zag movements are excluded from the conception. The sudden stoppages which angular movements imply, are its antithesis; for a leading trait of grace is continuity, flowingness. It will be found, however, that this is merely another aspect of the same truth; and that motion in curved lines is economical motion”, (O, 384).

“The reference to skating suggests, that graceful motion might be defined as motion in curved lines. Certainly, straight and zig-zag movements are excluded from the conception. The sudden stoppages and irregularities which angular movements imply, are its antithesis: for a leading element of grace is continuity, flowingness. It will be found, however, that this is merely another aspect of the same truth; and that motion in curved lines is economical motion”, (A, 316).

“Cet exemple du patinage nous fait songer que le mouvement gracieux peut se définir le mouvement selon des lignes courbes. Certainement, les mouvements tendus et en zigzag ne vont pas avec l'idée de la grâce. Les arrêts brusques et les irrégularités qu'impliquent les mouvements anguleux, en sont l'antithèse: car un élément essentiel de la grâce, c'est la continuité, le coulant. Toutefois, nous allons voir que c'est là tout simplement une nouvelle face de la même vérité; et que le mouvement en ligne courbe est un mouvement économique”, (L, 288).

主張可能になる。「曲線運動」と「経済的な・節約する運動」との関係の必然性は、以下のように証明される。以下では、「力の節約」によって「連続性」と「滑らかさ」が必然的に結果すると言われる。「曲線運動」という主観性を排除して成立しうる概念を介在させつつも、主観的に実感される事例によって「力の節約」と「連続性」「滑らかさ」が結びつけられる。

手足によってとられた一連の連続したポジションが与えられ、直線に沿って、これらのポジションの最初のものへ動かされ、急に止まって、別の直線方向に、第二のポジションに動く、そういったことが続いたなら、各々の停止で、手足に前もって与えられたはずみ・運動量は、力の一定量の消費で破壊されなければならないし、それに与えられる新しいはずみ・運動量は、力の更なる消費で破壊されねばならない。だが一方で、もし、その最初のポジションで手足を止める代わりに、その運動が継続するのを促され、その運動を第二のポジションへと異なる方向に向かわせるように横からの力が押しつけられるならば、曲線運動は必然的な結果である。また、もともとのはずみ・運動量を利用することによって、力は節約される。¹⁴

「曲線運動」がなぜ「優美」であると言われるのかについては触れずに、「優美」が「連続性」と「滑らかさ」であると特徴付けられる。節約する運動である曲線運動においてなぜ力が節約されると言われるのかと言えば、その運動には「もともとのはずみ・運動量を利用する」ということが生じているからである。

ある動きを実現するのに力を使わなければ使わないほどその動きは優美さをもつ。もし

¹⁴ “Given certain successive positions to be assumed by a limb, then if it be moved in a straight line to the first of these positions, suddenly arrested, and then moved in another direction straight to the second position, and so on, it is clear that at each arrest, the momentum previously given to the limb must be destroyed at a certain cost of force, and a new momentum given to it at a further cost of force; whereas, if, instead of arresting the limb at its first position, its motion be allowed to continue, and a lateral force be impressed to make it diverge towards the second position, a curvilinear motion is the necessary result; and by making use of the original momentum, force is economized”, (O, 384-385).

“Given certain successive positions to be assumed by a limb, then if it be moved in a straight line to the first of these positions, suddenly arrested, and then moved in another direction straight to the second position, and so on, it is clear that at each arrest, the momentum previously given to the limb must be destroyed at a certain cost of force, and a new momentum given to it at a further cost of force; whereas, if, instead of arresting the limb at its first position, its motion be allowed to continue, and a lateral force be impressed upon it to make it diverge towards the second position, a curvilinear motion is the necessary result: and by making use of the original momentum, force is economized”, (A, 316).

“Étant donné qu’un membre doit occuper successivement diverses positions, si on le meut en ligne droite jusqu’à lui faire occuper la première, puis qu’on l’arrête soudain, qu’on le remette en marche selon une nouvelle direction, tout droit, jusqu’à ce qu’il occupe la seconde, et ainsi de suite, il est clair qu’à chaque arrêt, l’élan précédemment imprimé au bras ne sera détruit qu’au prix d’un certain effort, et un nouvel élan ne lui sera imprimé qu’au prix d’un autre effort. Au contraire si, au lieu de l’arrêter à sa première position, on laisse le mouvement continuer, et qu’on lui imprime une action latérale pour l’incliner vers la seconde position, le résultat sera nécessairement un mouvement curviligne; et, grâce à l’emploi de l’élan primitif, une certaine quantité de force sera économisée”, (L, 288-289).

て、その動きとは、曲線運動になってしまう。スペンサーの議論には、節約される力の発生源についての考察が脱落している。関係性の全体がどこからやってくるのかといった問いが立てられていない。この不在の問いを改めて問うたのがラヴェッソンの議論であると言えるだろう。ラヴェッソンとは論じている範囲を異にする。範囲を問題にしているのがスペンサーであり、由来を問うのがラヴェッソンである、とも整理できる。スペンサーの議論は、知性の範囲内に収めようとする特徴をもつ。スペンサーは「優美」に関連する「共感」について次のように述べている¹⁵。

私はここで仮説を提示しようと思う。他のものによって提示される優美の観念は共感のうちその主体的基礎を持つということだ。他人が危険なのを見て私たちが身震いさせ、他人のものがきや落下を見て私たち自身の肢体の動きを時々引き起こす同一の機能は、私たちの周囲にいる人たちが経験している全ての筋肉感覚への漠然とした関与を私たちに与える。彼らの動きが暴力的でぎこちない時、私たちは、わずかに、彼らが私たち自身だった場合に私たちが持つであろう、不愉快な感じを感じる。彼らがくつろいでいる（：容易な）時には、喜びの感じを外へ示しているものの内にそれらが含んでいる、その喜びの感じと私たちは共感する（括弧内補足引用者）。¹⁶

別の存在者を「見て」、「私たち自身の肢体の動きを時々引き起こす同一の機能」が、他の「人々」が「経験する筋肉感覚への漠然とした関与」を「与える」。他の人の「身体」の「運

¹⁵ ベルクソンは「優美」を考察する際には重要な概念であるはずの「共感」を全く念頭に置きもせず、スペンサーが「優美」について考察していると『直接与件』では述べているように見える。ところが、単に「共感」という概念についてだけ言えば、実際には、スペンサーは「優美」を説明するのに「共感」という概念を扱っている。この点については本稿3で考察する。

¹⁶ “I may as well here venture the hypothesis, that the idea of Grace as displayed by other beings, has its subjective basis in Sympathy. The same faculty which makes us shudder on seeing another in danger — which sometimes causes motions of our own limbs on seeing another struggle or fall, gives us a vague participation in all the muscular sensations which those around us are experiencing. When their motions are violent or awkward, we feel in a slight degree the disagreeable sensations which we should have were they our own. When they are easy, we sympathize with the pleasant sensations they imply in those exhibiting them”, (O, 386).

“I may as well here, in a few lines, venture the hypothesis, that this notion of Grace has its subjective basis in Sympathy. The same faculty which makes us shudder on seeing another in danger — which sometimes causes motion of our own limbs on seeing another struggle or fall, gives us a vague participation in all the muscular sensations which those around us are experiencing. When their motions are violent or awkward, we feel in a slight degree the disagreeable sensations which should have were they our own. When they are easy, we sympathize with the pleasant sensations they imply in those exhibiting them”, (A, 317-318).

“Je peux tout aussi bien ici, en quelques lignes, hasarder une hypothèse: c’est que l’idée de Grâce, en ce qu’elle a de subjectif, a son principe dans la sympathie. La même faculté, qui nous fait frémir à la vue du péril d’autrui, qui parfois agite nos membres à la vue d’un homme luttant ou tombant, nous fait participer, d’une façon confuse, à toutes les sensations musculaires que nos voisins éprouvent. Quand leurs mouvements sont violents, ou gauches, nous sentons, bien que faiblement, les sensations désagréables que nous aurions, si ces mouvements étaient de nous. Quand ils ont de l’aisance, nous éprouvons par sympathie les sensations de plaisir que ces mouvements annoncent chez ceux en qui nous les remarquons”, (L, 290-291).

動」の様子を「見て」、同じ状態に置かれれば、同じように自分の「身体」も働く、ということが分かる。身体の「運動」の内に含まれた「筋肉感覚」が「身体」という外に示されて、それを「見て」、他の「筋肉感覚」と私は「共感する」ことができる。しかし、現に感じているのは、私の「筋肉感覚」である。スペンサーがここで用いている「共感」は、筋肉感覚によってもたらされる「共感」である。容易な運動としての優美がわたしたちに筋肉感覚としての容易さを知らしめるものであるために、「喜びの感じ」も私たちにもたらされる。いま現に「筋肉運動」を自分は感じていなくても、「覚えている」ので、思いだしつつ「共感する」。ここには、習慣が関与する「共感」理解がある。

*

スペンサーにとって「優美」はすなわち「容易さ」でありそれは「力の節約」の実現によって生じる。「曲線運動」としても実現する「優美」は、「連続性」「滑らかさ」をその性質とする。「喜びの感じ」をともなう「筋肉感覚」としての「容易さ」＝「力の節約」の実現と、その習慣的想起が「共感」を支え、それによって「優美」が実現する。スペンサーが「優美」に認めているのは、「筋肉感覚」の「容易さ」と「容易」であることの「喜びの感じ」であって、私たちが対象に「共感」することがあるとしてもそれは「筋肉感覚」への共感であるとスペンサーは、主張していると思われる。スペンサーの議論では、「優美」は習慣が関与しない限り成立しない「喜び」である。

3 『直接与件』における *grâce*

——初期ベルクソンの優美論と「共感」および「時間」——

本節では、ベルクソンの『直接与件』における *grâce* を考察する。しかしその前にまず、1889年に出版された『直接与件』が執筆された時期と同時期かそれ以前の1887年から1888年頃にクレルモン＝フェランで行なわれたベルクソンの美学講義の記録を扱う。この講義録に考察を加えることで、『直接与件』を含む初期ベルクソンの特徴を総合的に明らかにすることができるだろう。「美学講義」に考察を加えた後で、『直接与件』の優美論を扱いその独自性を考察することにする。

3-1 美学講義

『直接与件』の執筆とほぼ同時期に行なわれた「美学講義」で、ベルクソンは優美を論じたとされる。この講義で、ベルクソンは既存の研究を整理して、美は快適なものではなく、有用なものでも、〈善〉でもなく、真実とは区別されると述べたとされる¹⁷。諸研究の成果によって、「ある対象がわれわれに美しいものと見えるのは、この対象が、単に感性的な要素ならびに有用性への配慮とは無縁な満足をわれわれに得させる場合」¹⁸で、また、「このような対象の生産は責務的行為の性格を呈するものではない」¹⁹と言える、とされる。この満足は、「われわれが理念を認知して、それに感性的諸事物を結びつけるの

¹⁷ CII. 37-39、合田・谷口訳 23～25頁。

¹⁸ CII. 39、同書 25頁。

¹⁹ Ibid., 同書、同頁。

は疑いない²⁰ことを示す、とされる。しかし、「単にアイデアの表現として美を定義することは、美の範囲を狭めること²¹である、とされる。「人間は同時に感受性であり知性であり意志²²であり、「人間的なものはすべてわれわれの気に入る²³」ので、「ある妥当な形態のもとで外部に表現される感情や情念は、アイデアの表現とまったく同様に、美的な性格を呈する²⁴。〈美〉は多様性のなかの統一であること、〈美〉が秩序の実現であり、目的性を含意すると述べた²⁵」に続けて、ベルクソンは次のように述べたとされる。

その場合、〈美〉がわれわれに快樂 (plaisir) を得させることは容易に理解されるだろう。われわれ、われわれ人間は、われわれ自身とも思考とも知性とも活動とも何ら共通点をもたないかに見える物質を前にしている。ある特殊な場合に、この物質がある観念や感情 (sentiment) を表現し、また、ある努力 (effort) を表わしているかにわれわれに見えるとき、われわれは、精神による諸事物の征服 (conquête) とでも呼べるものを称える。諸事物はわれわれにより類似したものとなり、われわれは人間的な何かに関心を抱くかのように諸事物に関心を抱き、諸事物に共感し (sympathiser)、諸事物を愛し、諸事物を美しいと判断する。この分析を更に補うとすれば、われわれには、かわいい、優美な (gracieux)、崇高な、更には、滑稽なといった語を発することしかもはや残されてはいない。これらの観念もたしかに美的な観念である。²⁶

続けて、「優美さとは何よりも運動の美である²⁷」と述べて、ベルクソンはスペンサーの「優美さについての見事な理論²⁸」について言及し、「彼が言うには、優美さの本義は、可能な限り力を節約することで体を動かすことにある²⁹」と述べた、とされる。しかし、これらのスペンサーの理論も、先に整理したベルクソンの美の理論に組み込まれる理論であり、「力の節約がわれわれを喜ばせるのは、われわれが物質的対象の場所にわれわれ自身を置く場合のみで、そのときにのみ、われわれは力の節約を理想的な仕方です楽する (jouir)³⁰」のだとベルクソンは述べた、とされる。以上の記録が伝えるのは、「精神による諸事物の征服」とも呼べるものがあると思われるとき、「われわれが物質的対象の場所にわれわれ自身を置く場合」に、私たちは「優美」の美を感受するとするベルクソンの考えである。ベルクソンの美についての考えの要点は、人間を感受性、知性、そして意志を同時に備えるものと見做し、それらの性格を示すものすなわち「人間的なもの」は私たちの

²⁰ CII. 40、合田・谷口訳 26 頁。

²¹ CII. 41、同書 27 頁。

²² Ibid.、同書、同頁。

²³ Ibid.、同書、同頁。

²⁴ Ibid.、同書、同頁。

²⁵ CII. 42、同書 28 頁。

²⁶ Ibid.、同書、同頁。

²⁷ Ibid.、同書、同頁。

²⁸ Ibid.、同書、同頁。

²⁹ Ibid.、同書、同頁。

³⁰ CII. 43、同書 29 頁。

気に入るとする点である。この考えのうちに、優美の本質、すなわち、私たち自身が物質の対象に私たち自身を見て取ることの喜びの考察も含まれていると言える。

物質の対象に見て取るすべてが優美であると言えるわけではない。私たちが何を優美と見做すのかの考察は、ベルクソンの美学講義の「芸術」についての考察に現れている。「〈芸術〉は〈美〉の産出をその主たる機能としている」³¹。「芸術家はある観念、ある感情、ある努力を、それだけを表現することを目指す」³²。「すべての芸術が、感情や思考や行動など、人間的な何かをある感性的性質のもとに表象しようとしている」³³ことが分かる、とベルクソンは述べたとされる。芸術作品のなかで、「彫刻は荒々しい感情を嫌悪する」³⁴、「彫刻はむしろ優美さの友であって、彫刻家が表わしている態度のなかで予示 (préformer) された数々の動きや柔軟さや敏捷さは、風貌の狭義の表現より以上にわれわれを誘惑する」³⁵と述べたとされる。講義によれば、優美には予示を認めることが関わっている。荒々しさと相容れない優美には、規則性が認められていると考えられる。「彫刻では、均整のとれた形があって、身体が多様な部分が秩序と規則性によってわれわれの本能を楽しませる」³⁶。人間には、「拍子や律動や規則性への愛」³⁷があり、これは「人間の魂の最も強力な性向のひとつ」³⁸であるとベルクソンは述べた、とされる。

美学講義によれば、私たちの〈美〉への好みは、人間である私たちの私たちへの好み、すなわち、人間への愛着を示している、と言えるだろう。また、物質の対象を征服するとき、私たちは喜びを覚えるがしかし、この征服が完遂されることが無いことも私たちは知っており、そのうわべの征服感と、対象から「予示」が認められる場合に、私たちは対象に「優美」を感じる、と整理できる。「予示」に喜びを感じるのは、私たちの性向である「拍子や律動や規則性への愛」の故である。自らと似たものへの愛着としての人間愛と、物質に対する征服欲、そして、「拍子や律動や規則性」に対する好み、私たちに「優美」を感じさせている、とまとめることができるだろう。また、「予示」についての言及は、優美の感取には時間に関与していることも示していると思われる。

3-2. 『直接与件』における優美論³⁹

ベルクソンは『直接与件』の第一章で「優美」について次のように述べている。

スペンサーが主張したように、もし優美 (grâce) を努力の節約などに還元してしまえば、優美が私たちのうちに惹起する喜び (plaisir) は理解できなくなってしまう

³¹ CII. 44、合田・谷口訳 30 頁。

³² Ibid.、同書、同頁。

³³ CII. 44、同書 30～31 頁。

³⁴ CII. 45、同書 31 頁。

³⁵ Ibid.、同書、同頁。

³⁶ CII. 47、同書 33 頁。

³⁷ CII. 46、同書 33 頁。

³⁸ Ibid.、同書、同頁。

³⁹ この項は博士論文の文章を一部含むが、博士論文で論じた「未来」については十分に論じることができなかったため削除し、読解についても一部変更した。

う (DI, 10)⁴⁰。

ラヴェッソンにおける優美についての考察を確認した私たちにとって、この箇所ではベルクソンが述べていること、すなわち、「優美」と「喜び」とを何よりもまず結びつけなければならぬと考える点がラヴェッソンの「優美」についての考察と類似したものに映る。ラヴェッソンの「優美」解釈に寄り添いながら、スペンサーが「優美」に関して述べたことを否定的に批判するベルクソンの意図をすぐさま汲み取るはずである。

この一節を含む、ベルクソンが「優美」について述べている箇所 (DI, 9-10) をやや長文だが、引用し、ひとつのまとまりを為すと思われる長さに文章を区切って記号【A】から【G】を振り、それぞれに対して考察を加えることにする。

【A】 新たな要素が次々に介入してきて、根本的な情動のうちに観て取られるものとなり、実際にはかかる情動の本性を変容させているだけなのに、外見的には情動の大きさを増大させているかに思える、そのような事例として、更に際立った事例を提供してくれるのは美的な感情である。その中で最も単純なもの、すなわち優美 (grâce) の感情を考察してみよう。【B】 まずは優美とは外的な運動におけるある種の心地よさ、ある種の容易さの知覚にすぎない。ところで、【C】 容易な運動とは個々の運動が互いを準備し合うような運動であるから、私たちは、予見された運動のうちに、そしてまた、来るべき態度を示し、それらをいわばあらかじめ形成するような現在の態度のうちに、より高度な心地よさを見出すに至る。ぎくしゃくした運動が優美を欠くのは、その個々の運動が自足していて、それに後続する運動を告知してくれないからである。優美が折れ線よりも曲線を好むのは、曲線が絶えずその方向を変えるにもかかわらず、その新たな方向の各々がそれに先立つ方向のうちですでに指示されているからである。【D】 したがって、運動することの容易さの知覚は、ここでは、いわば時間の歩みを引き留めて現在のうちに未来を保持することの喜び (plaisir) と一体をなしているのだ。【E】 優美な運動が、あるリズムに従い、音楽を伴っているような場合には、第三の要素が介入してくる。すなわち、リズムと拍子のおかげでダンサーの運動がよりよく予見されるために、今度は私たち自身がその運動の主であるような気がしてくる。ダンサーがとろうとしている姿勢がほとんど見抜けてしまうので、彼が実際にその姿勢をとるときには、彼のほうが私たちに従っているように見えるのだ。リズムの規則性は彼と私たちのあいだにある種の交流関係を打ち立て、拍子の周期的回帰は、その各々が、私たちによって操られる架空の人形の一本の見えない糸のようなものなのだ。それどころか、不意にその人形が止まってしまうのなら、私たちの手はこらえきれなくなって動きだし、その人形を押して、この運動の只中にそれを置き戻そうとせずにはいられず、そうすると、そのリズムが私たちの思考と意志のすべてであることになる。【F】 このように、優美の感情にはある種の身体的な共感が関与しており、この共感の魅力を分析してみれば分かることだが、あなた方がこの共感を好む

七〇

⁴⁰ ベルクソンの『直接与件』からの引用については、特に合田・平井訳に基づいているが、一部訳を変更した箇所もある。

のは、それが精神的な共感と類似しており、あなた方に対して精神的な共感の観念を巧みに暗示してくれるからである。共感というこの最後の要素——他の諸要素もこの最後の要素をいわば告げ知らせた後には、それと一体になってしまう——によって、優美の抗し難い魅力が説明される。スペンサーが主張したように、もし優美を努力の節約などに還元してしまうならば、優美が私たちのうちに惹起する喜びは理解できなくなってしまう。【G】しかしながら、本当のところは、きわめて優美なものなら、どんなものの中にも、動性の徴しである軽快さに加えて、私たちに対する可能的な運動——潜在的な共感、それどころか現に生まれつつある共感——への指示を見分けることができると私たちは思う。この動的共感はずねに与えられる寸前の状態にあるのだが、それこそがより高度な優美の本質なのである。こうして、美的な感情の増大する強度も、ここではその強度と同じだけの様々な感情に還元される、この感情の各々は、それに先立つ感情によってすでに告知されていたもので、やがてこの先行的感情のうちで顕著になり、ついでこれを決定的に凌駕してしまう。この質的な進展を、私たちは大きさの変化の意味に解釈してしまう、なぜなら、私たちは単純な事物を好んでいるし、私たちの言語は心理学的分析の機微を言い表わすには不都合だからである（下線引用者）。

【A】が「優美」が論じられる理由である。ベルクソンが「優美」を扱うのは、「本性」と「大きさ」とは、「質」(qualité)と「量」(quantité)を表わしているのだが、区別されるべき「質」と「量」とが区別されにくいという意味で適切な事例を提供するものだからであると思われる。また、それが「美的な感情」のうちで「最も単純なもの」であるからでもある。

【B】で、ベルクソンは、「まずは」と始める。ベルクソンはここで、「優美さ」が感情としてどのように私たちに抱かれるようになるか、そのはじまりから述べようとしているように思われる。すなわち、ベルクソンは「優美」とは何かを考えるにはその感情の発生の仕方について考える事が適切であると見做しているということがここでは示されているように思われる⁴¹。続く引用が「感情」と「知覚」の関係について規定するのではなく、私たちに「心地よさ」と「容易さ」を「知覚」させる「運動」をより詳細に考察していることが、私たちのこの考えの正しさを示していると思われる。

【C】では、先ほどは「外的」と言われていたに過ぎないその「運動」が「容易」であると見做されていて、「容易な運動とは個々の運動が互いを準備し合うような運動」であり、こういった性格を帯びた運動であるが故に、私たちはそこに「高度な心地よさ」を見出すに至ると述べられている。ここでは私たちに「優美」であると感じさせる「運動」の客観的側面が述べられていると思われる。また、ここには「予見」ということ、そして「来るべき態度を予め形成する現在の態度」ということに共通するものが示されているとも思われる。すなわち、「準備」、「予見」、予告、そして先立つものによる「指示」が、同等のものとして用いられていることが示されていると思われる。現にそこに認められる運

⁴¹ 由来を問うというこの点において、ラヴェッソンとベルクソンは同じである。

動のうちには、現在そこにあるもの「より後」の状態が含まれている。「より後」を私たちに知らしめるものが「優美」を私たちに感じさせるのである。

[D] では、「運動することの容易さの知覚」に過ぎなかった「優美」が含む「喜び」の内容が明らかにされている。その「喜び」とは「時間の歩みを引き留めて現在のうちに未来を保持する」ということである。ここで「知覚」と「喜び」が一体になるかのような様子が描かれる。ここで「喜び」についてベルクソンが述べていることには、先に引用した箇所における「心地よさ」を引き継ぐ目的もあると思われる。「より後」を含むということは単に「予見」や予告、「指示」を可能にするだけでなく、私たちに「喜び」をこそもたらすものである。そしてその「喜び」は「時間」と関連づけられるものである。

[E] では、リズムと拍子は、対象がどのように動くか、その運動を予見しやすくするが、その予見しやすさのために、その運動を「知覚」する主体から、『知覚』対象」となる運動を運動する主体になるように私たちに思われてくる、という。また、「よりよく予見される」ことの中身とは、対象となるダンサーの後続する姿勢がほとんど見抜けてしまうことだと述べられている。対象の現在の姿から未来の姿が予想できるとき、その対象が実際に、未来に、予想できた姿へと移行したときには、私たちが過去に予想した姿にその対象が従ったようにみえる。ここでは、私たちは運動する対象を知覚する間に、対象の現在の姿のうちに未来の姿がある状態から現在の姿のうちに過去の姿がある状態へと移行することがあり、その移行は、私たちが知覚している対象が、私たちの知覚に従ったように見えるという仕方では私たちに捉えられると述べられている。このような捉え方は、私たちにあたかもある運動の知覚を介して対象の運動の主体が、「彼」から「私たち」に交替して運動するものを操っているかのように思わせるものになっている。そして、あたかも運動の主体すら交替したかのように思わせるこのような運動の知覚における時間感覚の移行を助けるのは、リズムの「規則性」と拍子の「周期的回帰」である、と言う。運動する主体とその運動を知覚する主体が聴覚の対象となるリズムや拍子を共有するということが、私たちに、ここで主体の交替が行なわれているかのように容易に思わせる導きになっている。しかし実際には、主体が操る運動がリズムの規則性と拍子の周期的回帰に合っているだけであり、知覚する主体もそのリズムと拍子とに従っているに過ぎない。対象の運動が不意に停止すると、今度は私たち自身がその運動を継続しようとすることがある。先の引用とは異なり、運動する対象がここではダンサーから人形だと想像されたものに変わっている。人形は主体的にある運動を行なうものではないので、ここでは運動する主体が問題になっているとは考えられない。ここではもはや、取り上げる運動が匿名的な運動になり、しかも実際に実現された運動のことは述べられていない。停止が続く限りそこには、私たちが把握できるような未来も過去もない。ただ、運動の知覚が、リズムという規則性や拍子という周期的回帰を伴う知覚であるために、対象の運動変化が失われてしまったからといって、そこで時間変化を把握するはたらきが完全に失われてしまうということはない。知覚がそういった性格を持つという証拠となるのは、リズムや拍子が私たちを導き、私たちは運動を続けようとするということである。すなわち、人形の糸がもはや切断されて人形が動けなくなった時、つまり、私たちが糸という再帰的回帰を可能にする拍子を無くしても、規則性というリズムに一致することが出来る限りで、私たちは人形の運動を回復しようと試みる。私たちが回復するための手掛かりにするのは、私たちが把握する規則

性だけであり、そのみに頼って対象を再構成しようとする限りで、その回復しようとする規則性が私たちの意志と思考のすべてであることになる。

【F】でベルクソンが述べる「精神的な共感」の中身には立ち入らず、ここでは、それとの類似性が身体的共感にはあるとベルクソンが述べていることを確認するにとどめる。ここで重要だと思われるのは、ベルクソンが「優美」の本質が「共感」にあると述べていることである。ベルクソンはまず、「優美」の魅力が「共感」という要素にこそあると述べる。そして、私たちが「優美」について説明するのであれば、その魅力を捉える私たちがもつ喜びについて考えなければならず、また、それはスペンサーが説明したような方法では説明することができないもので、「共感」について述べて初めてその説明に成功すると述べられている。そして、スペンサーが「優美」について説明したその仕方というのは、「優美」を「努力の節約」に還元するという仕方であるとベルクソンが考えていることが示されている。

【G】で「可能的な運動」「潜在的な共感」「現に生まれつつある共感」と表現されているものは、対象の現在の姿に「可能的」と「現実的」、「現勢的」と「潜在的」、「生まれた」と「生まれつつある」といった対比を可能にするものであり、現在の姿にそれのみでの完結を許さないものである。そしてそれは「動的共感」と表現されるものであって、そこには運動の停止を否定する表現が見られる。そしてその「動的共感」という「優美」の本質が、与えられたもののうちにではなく「今にも与えられる寸前の状態」のうちにありと述べられており、現在における未来のうちに含まれ、しかも現在における実現された未来としての過去のうちに決して含まれないものであることが示されている。すなわち、「優美」の本質は決して現在化することのない未来のうちにしかないものであり、私たちはより高度な「優美」を感じ得、それは決して実現しない未来が到来しつつあることのしるしであることを、ベルクソンは述べているものと思われる。

上述の【F】で確認されたように、ベルクソンはスペンサーの優美論を批判して、優美を考察するうえで「共感」が重要であると述べている。その批判の矛先は、優美の「筋肉努力の節約」への還元だけでなく、共感についてのスペンサーの主張にも向けられていると考えられる。ベルクソンの「共感」は、スペンサーの「身体的」「共感」を引き受けつつ、予告、「時間」とも連続する概念となっている。ベルクソンにおいて「優美」の本質が「共感」にあると述べられるとき、そこではスペンサーの「共感」にはなかった時間性が併せて考慮されている。この点で両者の「共感」概念は異なっている。とはいえ、すでに見たように、ベルクソンは優美論のなかで「時間」について直接論及してはいない。それには複数の要因がかかわっていると思われる。けれども、優美論の本質は時間であると主張しないことで、『直接与件』第一章の「質」と「量」をめぐる論述が、時間における「質」と「量」という問題を巻き込むことはなく、この両者の峻別という課題に制限されているように見える。いまは、この点を指摘するだけに留めておきたい。

*

『直接与件』の優美論を扱う前に、私たちは優美についての考察も含むベルクソンの美学講義の内容を確認した。そこでは、人間への愛着、征服欲、そして規則性への好みと、「予告」の認知と優美との関係が扱われていた。『直接与件』の優美論においても、特に

「予告」「予見」が論じられていたことは見た通りである。『直接与件』の優美論はこの点において美学講義と類似してはいるが、美学講義よりも展開的議論をしているように思われる。

『直接与件』では、「優美」とは何かを考えるにはその感情の発生と生成の仕方について考える事が適当であるとベルクソンは見做していると思われることを確認した。即ち、ベルクソンは「優美」の由来を問うている。また、現にそこに認められる対象の運動のうちには、現在そこにあるもの「より後」の状態が含まれており、そしてその「より後」を私たちに知らしめるものが「優美」を私たちに感じさせるということをベルクソンは私たちに伝えている。「より後」を含むということは単に「予見」や予告、「指示」を可能にするというだけではなく、私たちに「喜び」をこそもたらすものである。そして、運動の知覚は、その運動が優美であれば、私たちに私たち自身が知覚する主体であることから運動する主体になるかのように感じさせる効果をも持つとベルクソンは述べている。私たちは「より高度な」「優美」を感じ得る。それは、決して実現はしないが常に到来しつつある未来があるかのように感じられていることによるのである。到来と表現できる事態は、ベルクソンが「共感」を「私たちに対する（可能的な）運動（丸括弧引用者）」(DI, 10) と述べることによっても表現として正しいと思われる。「共感」は私たちにとっては、何らかの働きかけによって引き起こされてしまうものである。

結

本稿では1でラヴェッソンにおける優美を論じ、ラヴェッソンにおける優美論では、質同士の働きかけ合いに優美の特徴を形づくる喜びの起源があると考えられていることを確認した。2では、スペンサーが論じる優美について扱い、スペンサーが「筋肉運動」の「容易さ」を「喜び」と結びつけていることを確認した。運動の容易さの知覚に「優美」の「喜び」の起源があるとスペンサーは考えていたと言えるだろう。3では、ベルクソンによるとされる美学についての講義の記録を扱うとともに『直接与件』の優美論を扱った。ベルクソンにおける「優美」と「喜び」の関係について論じ、「より後」を含むということが、「予見」や予告、「指示」を可能にするだけではなく、私たちに「喜び」をも可能にするとベルクソンは考えていたことを明らかにした。

「優美」を巡る三者の議論を整理して初めて次の指摘が可能になる。それは、三者における「優美」と変化の関係である。ラヴェッソンの「優美」は「調和」でもあり、関係そのものを表現する概念である。また、「優美」はあらゆる事物の進展・変化そのものを表現しているだろう。スペンサーの「優美」には習慣が関与しており、そこには変化や変遷をいかに保存するかが考えられていると言える。ベルクソンにおいては「より後」の成立の条件としての変化や移行についての留意があると考えられる。そもそもベルクソンは「質」「量」を変化に留意しながら論じているのである。変化そのものの「美」か、変化を保存する「美」か、あるいは変化に留意する思索によって示される「美」か、といった違いがあるにせよ、「優美」について明らかにしようとする思考は、変化について考える、その思考が成立条件となっている。ベルクソンは運動変化を時間と関係づけるのである。

ベルクソンの「優美」についての議論は、ラヴェッソンのように由来を問う議論をしながら、スペンサーのように優美の現象的分析を行なうものである。ベルクソンがラヴェッ

ソンともスペンサーとも決定的に異なる点は、ベルクソンの優美論は時間論へ接続されているということである。ベルクソンの優美論の独自性はベルクソン自身の主張の「共感」にあるのではなく、むしろ「優美」と「時間」とが連続的であることにある。この独自性は、ベルクソンがその影響下にあったラヴェッソンと、ベルクソンが直接の批判対象とするスペンサーの優美論の特徴を明らかにし、彼らの議論とベルクソンの議論との違いが何かを明らかにすることによって導き出された結論である。「喜び」や「共感」（ラヴェッソンにおいては「調和」）を中心とする叙述に親近性が見出されるとしても、三者の議論の意図が明らかになるにつれて、それらは全く異なる相貌を見せる。本稿で扱った三人の哲学者が引き込まれたように、美しく踊られるそのダンスは、私たちを哲学的思索の喜びにも引き込むのである。

文献表

一次文献

・ベルクソンの作品からの引用には下記の略号を用い、P.U.F., Quadrige 版の頁数を記した。下記括弧内には本稿で引用した邦訳書を記す。引用の際には、訳者名と頁数を記した。本稿では、grâce の訳語は、「優美」に統一させていただいた。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889. (邦訳『意識に直接与えられたものについての試論』合田正人、平井靖史訳、東京：筑摩書房、2002年。)

PM: *La pensée et le mouvant*, 1934. (邦訳『思想と動くもの』河野与一訳、東京：岩波書店、2005年。)

CII: *Cours II: Leçons d'esthétique à Clermont-Ferrand. Leçons de morale, psychologie et métaphysique au lycée Henri-IV.*, Paris: P.U.F., 1992. (邦訳『美学講義：道徳学・心理学・形而上学講義』合田正人、谷口博史訳、東京：法政大学出版局、2000年。)

・ラヴェッソン

De l'habitude, La philosophie en France au XIX^e siècle, Paris: Fayard, 1984 (1838, 1868). (邦訳『十九世紀フランス哲学』杉山直樹、村松正隆訳、東京：知泉書館、2017年。)

・スペンサー

Essays: Scientific, Political, & Speculative., vol.II, *The Works of Herbert Spencer*, vol.XIV, Osnabrück: Otto Zeller, 1966.

Essays: Moral, Political and Aesthetic., New York: D. Appleton and Company, 1874.

Essais de morale de science et d'esthétique. Essais sur le progrès., Trad. M.A. Burdeau, Paris: Librairie Germer Baillière et C^{ie}, 1877. (引用にあたってはBnFのGallicaを利用した)

二次文献

石井敏夫、「哲学と笑い——『笑い』に潜む〈哲学の倫理〉——」、『ベルクソン化の極北』、千葉：理想社、2007年。

杉山直樹「ラヴェッソンという鏡像」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』9巻、徳島大学、2002年。

杉山直樹、『ベルクソン——聴診する経験論』、東京：創文社、2006年。

瀧一郎「優美と恩寵——ラヴェッソンの美学序説」『大阪教育大学紀要 I 人文科学』44巻、大阪教育大学、1996年。

藤田尚志『ベルクソン反時代的哲学』、けいそうビブリオフィル (keisobiblio.com/author/fujitahisashi/)。

Pierre d'Aurec, "De Bergson spencerien au Bergson de l' "Essai", *Archives de philosophie*, vol. XVII, cahier 1, Paris, 1947.

ジャン・ルフラン『十九世紀フランス哲学』川口茂雄、長谷川琢哉、根無一行訳、東京：白水社、2014年。

Claire Marin, Ravaisson et Bergson: la science du vivant, dans *Annales bergsoniennes III. Bergson et la science.*, Paris: P.U.F., 2007.

Patricia Verdeau, "Sur la relation de Bergson à Spencer" dans *Annales bergsoniennes III. Bergson et la science.*, Paris: P.U.F., 2007.

De la grâce dans l'*Essai sur les données immédiates de la conscience* de Bergson

Natsuko KITA

Quelle est l'essence de la pensée sur le concept de grâce dans l'*Essai sur les données immédiates de la conscience* (1889) de Bergson ? Pour répondre à cette question, nous avons adopté pour méthode de comparer la conception de Bergson avec les concepts de grâce dans des textes de Ravaisson et Spencer.

Dans cet article, nous avons clarifié les points importants suivants :

- 1) L'analyse de la grâce dans l'*Essai* de Bergson diffère des pensées sur la grâce qui se trouvent dans les textes de Ravaisson.
- 2) Dans la pensée de Spencer sur la grâce, se trouvent des analyses du concept de sympathie. Cela signifie que lier la grâce au concept de sympathie n'est pas l'essence de la pensée sur la grâce chez Bergson.
- 3) La grâce est connexe au temps. Cette perspective constitue l'originalité de la pensée du concept de grâce chez Bergson.